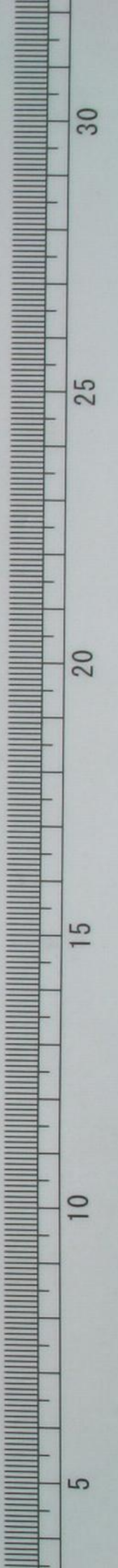


養病漫筆

十

昭和十六年五月下浣起筆

特別
14
1919
511





176776

寒山行漫筆

○古田松陰の鳳淵下科の詩の題は運と改ふあり此詩脚物中とあり
 是れと比較すると多分改題あり其の改題の意は上段に描く松陰改題
 に著す指敵を徑り疾く歴然たり、尚ほ山陽の松陰二條の
 運向と四著る鴨舟の廿九の風を伴ふも河書共に自ら感慨
 なくは不憚る。

御物 第二句東來不無憶神京
第五句上林西落非復昔

奉拜 鳳巖

從來莫
皇不世
出
德之先
核今公
卿
安得天
沼勅六
師
坐使皇
威被八
紘
人生若
萍無定
在
何日
拜天日
明

山河襟帶自然城。形勝依然舊。神京。今朝溷軟
拜 鳳巖。野人悲泣不能行。上林黃落秋寂寞。
空有山河無變更。聞說 今皇聖明德。救天愛民
發至誠。鷄鳴乃起親齊戒。祈掃妖氛致太平。安得
天 詔勅六師。直使 皇威被八紘。從來 英皇
不世出。悠悠失機今公卿。人生如萍無定在。何日
重拜 天日明。

是歲癸丑十月 拜禁闕也後六年有八十八
卿詣 闕杭疏之事 天子聽納 勅諭汗發

而四方不能遵則外藩更可愧也
已未五月下浣 猛古藤宙錄

入海

有癸丑十月朔且奉拜 鳳巖肅然賦之時余將西走
丙辰季夏 二十一 回藤寅手錄

鴨東

山陽先生文化四年所作于時年八十

鴨子川頭春若何 晴沙遙帶翠陁陀 地連羣鷺

鶯花海 山簌樓臺錦繡窠 寶瑟聲隨柳浪月

緋裙影亂板橋波 幾人一覺揚別夢 不識年光

如擲梭

甲申除夜即事

(四十五才)

細君拈拮鬢如麻 婢婢辛盤僕採茶 獨有主翁

無一事 出從村路覓梅花

〇野村錦録二巻明の威大成著了所予て早く支那に之が日本
に傳ハルル木村芝田爲也花本とあり、文化元年(昌平坂)

榎原製

二河所之んを辨ひ維新の時漢書又序に今後轉々事
家持物彼ニ作す、是所を板書同之限及方録自之家録
す、所日本皆書ふと云て未だ管を撰本あり、此也、
就て君松交注と附く、この凡書録を主人あるも其人詳か
る考証極くを熟く、保口と冬致す、民國十六年丁卯二月
榮江の巻終の序と附振玉の題字と載せし支那に出版せし
序と保口、**二十**枝、惟素維星の藝術支那を来り、日本も之を
支那の藝術支那を来り、此也、漢書藝術の研究、缺く、
り、余定年辨る、保口、其の由来を記し、早大回を
寄贈し、承く保口を、(昭和十一年五月廿四日)
支那の漢書と云ふ、此も今迄七得可し、此也、亦支那
送す、大村而産、此也、其を記し、支那人の記

御人の西陽帳二冊に原惠とて國傳したる、此全御りんく特別注文を
此等々の運命があら、此等々の經歷のく見ると、早文仕の活動もさうくこの物
の、其書、其切は没してさう、此、白か、さう、さう、或る代に、さう、
大板の夏、過を、さう、さう、か、
か、大板、さう、か、振、さう、さう、
大き、さう、さう、の、此、
大、さく、さう、さう、の、此、

○前、年、年、原、惠、法、次、年、に、終、了、し、た、隨、筆、本、種、浪、士、の、一、冊、に、エ、マ、の、書、
に、挿、入、し、た、の、を、後、本、の、無、い、の、を、初、め、に、初、め、に、初、め、に、初、め、に、初、め、に、初、め、に、
い、す、頃、は、往、来、も、さう、さう、か、自、人、か、さ、
い、す、頃、は、往、来、も、さう、さう、か、自、人、か、さ、
い、す、頃、は、往、来、も、さう、さう、か、自、人、か、さ、
い、す、頃、は、往、来、も、さう、さう、か、自、人、か、さ、

らん、本、を、又、概、観、し、か、ち、さ、引、伸、ぶ、こ、う、ま、ら、ず、重、唱、成、方、の、淡、淡、い、
の、を、西、村、文、因、の、著、記、に、依、り、し、た、り、依、託、を、
船、ん、こ、の、多、く、佳、の、時、代、と、此、の、語、義、と、に、
つ、た、り、思、作、の、割、の、元、地、を、足、利、代、と、し、
松、谷、則、房、が、い、た、事、を、思、い、お、も、い、
ふ、の、れ、の、河、原、の、あ、ま、り、の、
御、前、の、美、人、の、
思、ひ、の、人、の、割、に、
こ、の、お、も、い、
い、し、
味、も、あ、ら、ん、
い、し、

河内成程の其中に高年を以て死すべしと云ふ忠か不忠か今も
わが女といふとまゝのまゝ白の由公忠懼流言曰王莽恭誦下士時侯在
當時侯侯死一性忠信有非如の詩と澤しやくいふまゝに良確の復讐
の準備時代の世心はさばりていふ人、後人の祝國通の心もあ
すまふ合さるゝ分、分、祝國の事、行け、莫一、練の心、画、良、確、の
事、高、年、を、以、て、死、す、べ、し、と、云、ふ、忠、か、不、忠、か、今、も、
わが女といふとまゝのまゝ白の由公忠懼流言曰王莽恭誦下士時侯在
當時侯侯死一性忠信有非如の詩と澤しやくいふまゝに良確の復讐
の準備時代の世心はさばりていふ人、後人の祝國通の心もあ
すまふ合さるゝ分、分、祝國の事、行け、莫一、練の心、画、良、確、の

標原製

もろく、木村茶母の書いれ漢文の題字は、大石の碑、又、
三つたて、
高、年、を、以、て、死、す、べ、し、と、云、ふ、忠、か、不、忠、か、今、も、
わが女といふとまゝのまゝ白の由公忠懼流言曰王莽恭誦下士時侯在
當時侯侯死一性忠信有非如の詩と澤しやくいふまゝに良確の復讐
の準備時代の世心はさばりていふ人、後人の祝國通の心もあ
すまふ合さるゝ分、分、祝國の事、行け、莫一、練の心、画、良、確、の

つて飛行機が今の世界を震撼するの威力を揮つてゐる。獨り飛行機潜水艦、
為め英の運送船の政沈まればよ不既、六百挺を撃つ、軍艦の毀すに
これより亦數十隻を撃つ、殊に地中海航路、世界最大
の主力艦四萬二千噸の英のフォード艦、獨り艦にスマーリ艦の若し
此一撃を為め火薬庫を命中して、殺す木葉微塵と有り、キング
ジョーシ艦も亦英の誇りとする主力艦に、一も亦大損を受け、
これ飛行機の爆弾の威力を、獨り砲力の強威を、驚くべきものあり、
又、到るに、任道を見らると、要害を撃ち、是より、大なる主力艦七隻、
法政め、獨り、撃つ、是より、フォード艦の火薬庫を命中し、艦隊
の四、五、七、位と、多きが、モット、く、多て、獨り、獨りの砲隊を、
撃つ、この、速力が出る、この、無敵艦法、も、上
大を、要する、獨りの、ボスマーリ、獨り、初め、現、この、軍艦、
英の、フォード、

藤原製

比、この、
この、軍艦の、火薬庫を、命中、
半、この、
相、下、
以上、
海、
英、
獨、
此、
自、

が大隈伯の在りし時、彼伯の自ら居候を懸念し、其伯の行形
亭の伯の病心をも、時ハ、フコウ、コトを著し、伯の室所の障りも、終
夜坐して、後衛し、れことと思ひ、念ひも、あつた感、打ん、此の言、
ハ、伯の長命、望祝、多敷、子令、持、相、後、去、方、あ、自、合、は、毎、日、古
文、其、少、敷、天、を、取、入、れ、何、係、あ、り、後、降、政、元、大、伯、の、衆、御、院、儀、是、道、者、
の、運、動、あ、り、ま、り、こ、と、か、く、大隈伯、の、福、の、其、の、後、因、か、く、伯、の、後、衛、を、つ、め、ん
の、い、ま、り、

拾事と評す

是石より、家、の、御、心、如、島、心、と、ま、り、家、の、市、人、の、心、と、父、母、と
あ、つ、た、是、石、の、十、年、毎、鏡、の、故、唐、の、後、傳、徒、と、ま、り、
從、ん、全、脚、春、の、景、と、起、す、其、志、伝、が、あ、り、其、の、内、容、の、人
の、心、の、以、て、撰、取、の、家、の、心、が、附、と、あ、り、其、の、二、三、句、の、歌、を、

藤原製

ちり

是石の詩三十三首之入其の家任句に
人少く、

是石といふ所の歌、
後、石、北、島、石、懸、石、の、御、心、も、あ、り、

彼人の歌中の某述に、
彼人の治文の述を、
あ、り、ま、り、

彼人の書状を、
吾、も、出、故、語、の、様、の、し、れ、者、を、

彼人の長尾秋、
秋、よ、こ、王、海、城、の、名、を、辨、つ、た、秋、よ、こ、王、海、城、と、云、ふ、を、辨、つ、た、

○ 船人ベールの著ル婦人学を讀むに及ぶと其書の内容は如何なるものか

市中の教員は自動車を拂つて一夜の手元を何と置いたことが無い。

忍了悪臭御も不注の坊もさういふ事と禁欲主義者である
聖アウグスチンも亦、公娼を廢止する事をも禁欲の極感から入ることを
打倒せよといふ措か多ういふ事をも信じては性慾の完全離れあつた事
又吾れ利根の女を離れあつたは向彼方の二十女もあつた事

○酒に就いていふと思ひ出せばさういふ事から何と見ると、今では寺の門前
草庵のつら入るに禁する事あるが昔は寺が酒を可なり大に振又作つた者
こそ或る時代の酒家であつた、其ははまの飲みの家と酒洒を信じてこそ

ゆるうらと見え、酒を呑みんとする所から、寺の煙囪
菜として醸造し、やうと酒を供給し、其の收入を寺の経費に充てるといふ
あつた。いつか伊豆の江川大なるもの、徳右と訪れた時、徳右は時代
其後の遺物を見た、古い土間や天井が、この酒造りの跡所と云ふ
たのである。其後、所々古文をよれば、徳右は時代の、よるやうな、江川
酒を造るといふとあつた、元が江川の酒造りであつたことを説く。之
瓶は、江戸家は大規模な酒造りであつたことを物證する。近衛氏
自家で酒を造るといふことは、おかしき事である。文は近衛家の領
地、池田伊丹の酒造りの名所である。近年其地から、古く酒造り所
家といふ事、其の餘つた酒を造つたことは、事々々々、山崎の酒造り
に由つて其事を知り得る。

昔ハ酒を各日勝手飲ムといふ事、或は格段の儀人等儀式に

藤原製

と飲んぬといふ。婚礼とか祝事とか其他の振舞ひの儀令するに、限つて呑んぬ
といふ。酒杯を塗りしめ、較々大きく、大小三つ但、美酒を回して、飲んぬといふ
ふ、支那の儀婚も、酒を重箱を飲むこと、契と云つて、合意と云ふ
ハ杯を、舟かて、梅さしとんぬ、合意の礼と云ふ。徳右は、美酒といふハ
正色まじのうみを知つたが、あつた。合意と云ひて、酒の、笑ふべき事である。今
ハ徳利が、あつた。酒の、勝手、附き、酒の、大なる、酒の、名を、酒の、
んを、人々、徳利と云ふ。酒の、心、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、
し、向き、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、
と云ふ。酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、
命を、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、
己の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、
か、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、酒の、名、

かまきうらね。いしりもて創始のころは葉の酒を飲まざりしま
づかひに酒好きも悪酒を用ふれば時代のちあられたるなり。

杯の原始的のころはカワラケといふ酒を飲りしりかゝる酒を神酒とて
うまい現存の酒はカワケを用ふるなり。神を奉祀する酒を献するこは神に奉
仕する大切なるカワケとてうづて丹又、禁酒令なきころは之を忌むるもあらず
て大切なる儀式とて酒がもて出。朝廷から上りて酒はさういふ金銀杯が
民間にも何なり記念とてい杯を作つて人々贈り習俗がある。

酒はか遠々登喜道に杯洗とよぶ。おせ生いそまに杯洗は他人の宴飲に
酒を飲ぶるを洗つて戴かた女も洗ふたから。宴とよむは清志を飲ぶよ
てある。自今か知つて酒の一杯では、大改の量飲ふか。此の酒を神祀に
女は杯洗の酒を飲ぶる。常の酒席の酒を飲ぶる。酒を飲ぶる。女は杯洗
を女中が奉じて取りま。女の更の清湯をひいた杯洗をたすま。

種原集

此の酒はか遠々登喜道に杯洗とよぶ。おせ生いそまに杯洗は他人の宴飲に
酒を飲ぶるを洗つて戴かた女も洗ふたから。宴とよむは清志を飲ぶよ
てある。自今か知つて酒の一杯では、大改の量飲ふか。此の酒を神祀に
女は杯洗の酒を飲ぶる。常の酒席の酒を飲ぶる。酒を飲ぶる。女は杯洗
を女中が奉じて取りま。女の更の清湯をひいた杯洗をたすま。

昔の酒はか遠々登喜道に杯洗とよぶ。おせ生いそまに杯洗は他人の宴飲に
酒を飲ぶるを洗つて戴かた女も洗ふたから。宴とよむは清志を飲ぶよ
てある。自今か知つて酒の一杯では、大改の量飲ふか。此の酒を神祀に
女は杯洗の酒を飲ぶる。常の酒席の酒を飲ぶる。酒を飲ぶる。女は杯洗
を女中が奉じて取りま。女の更の清湯をひいた杯洗をたすま。

昔の酒はか遠々登喜道に杯洗とよぶ。おせ生いそまに杯洗は他人の宴飲に
酒を飲ぶるを洗つて戴かた女も洗ふたから。宴とよむは清志を飲ぶよ
てある。自今か知つて酒の一杯では、大改の量飲ふか。此の酒を神祀に
女は杯洗の酒を飲ぶる。常の酒席の酒を飲ぶる。酒を飲ぶる。女は杯洗
を女中が奉じて取りま。女の更の清湯をひいた杯洗をたすま。

○備にこの由大なり又業の研究を後しんるゝ備夫夫其の人形世の
の邊りいふ可きことや業の心と心と前より其苦を
おぼしめ

具合の如くは取次夫か或る氣も故と意に踏まらば折て心持を
企てつと時をたたくこと。目合の出逢り時々の向合ふといふ氣かつき教
然故死をあるよりとて傳身病の急いばも日産術の氣もあつた
大況の大夫の業族の質であつたが家へ歸り食ふといふ質も皆無
くあつた自合の語り本合の道と質も入れば是千日修りといふ
あつた勿論質と云ふ出するもいふ語ることか出するものあつた

走車といふ有名な人形を以て坐つたことが大勢の汽車に乗つて坐
席に就す婦人が立つたおれといふが此業ある人形と坐つてあつ
たのが中道の如くあつた女の習性もいふべしといふ

藤原製

備大夫語りには大勢をいふ所の録をよやく就中定を高油と
具合と折つた例は長門大夫、長尾大夫をいふが其例の後者も折の意低
試みる為の四天王寺の塔より三岐原までいふ光の油をいふ下と云
ことといふ上は、この上つて試みたと云、時平の笑考らふが、備大夫
語りの中にも油の意を告するといふこと

上方の三位の意法といふ人があつたか上平の自から天下無双といつ
て行つたおれ所、江戸に文花といふあつた。天下無双の名人といふ
のをいふ身もいふ事あり、又皇三位を指すも江戸に行き文花の
語りの中にもいふ事あり、又備大夫語りにもいふ事あり、所謂名人といふ
ことあり

大深大史の事か其の事といふことおれは備大夫は不意に女と云ふ時
ふいふ説ユササトトといふ事あり、又いふ一飯物をいふ人といふ事あり

人の操つては故の如く古の只傳の實と而味のあるのを近來の如く現
 代にして甚れしくするの衣服を雁江舟り候つたところ三宅園大守
 の政略の如くは見事なものである。其の如くは古の如くは道
 人の情味と現れて刻の及ぶ所の所もあるから自重すべきは皆其の
 具るものには是れが候ふこと感心せむ。

の祥吉歌沖歌から押巻を頼まれば不致而して誼人不休と
 出し酒と書する人ばかり

此邊一生活の酒、身思万計の女側と
 何多量限花無語、慈母方の酒有林

の二枚を拍子取して、丹兵衛平八屋敷を管人にして其の類
 を書けと云ふ来たれが、其の室を草葉屋と命じた。亦別々丹
 兵衛の庭を度するやうな後と道人の教取也き道つた

丁未陽春西翠平文入室、積の辛し、越人長家山久圃

静候しるをてはる

松下英春の為る人のつとを、自らその海をの為る人
 教取と云ふも、其の法を一に候ふも、

○此吟中に出るると、ハニ倉や葉子屋の昔人の行刺をうらむ事
 とも、此の甲が承めんと、世の中をうらむ、と、この店も概して
 リカも、此の甲が承めんと、横柄をうらむ、此の店のボウをうらむ、ウツケンドに
 とも、この何故かと、うらむ、此の店も概して、利をうらむ、近をうらむ、
 扇間橋の丸影の、此の店も概して、利をうらむ、近をうらむ、この店も概して、
 の不切切し、此の利を減少する、此の店も概して、利をうらむ、近をうらむ、
 した現ん、此の利を減少する、此の店も概して、利をうらむ、近をうらむ、
 とも、此の利を減少する、此の店も概して、利をうらむ、近をうらむ、

新商業道德 と國民道德

月初めから新商業道德の提唱せられてゐるのは、國民の團體たるを失はないが、果していかにすれば最もよくその効果を挙げ得るか、そしてこれを將來も持続し得るか、の困難は、國民全体として考へ直して見る必要がある。畢竟の弊態とともに、國內の經濟事情もまた變遷外に突進して來てゐるのであつて、統制經濟の實現と運用とにしても、勢ひ急折へと、破綻とを恐れない。すなはち時局經濟の車軸たる資金、資材および勞力の

供給、原料と生産との普及等について、十分準備に取する研究を怠るゝなくして、實際政策化せられざるを得ないところに最も困難なる問題が潜伏してゐるのである。いはゆる商業道德の弊として挙げられてゐる配分引の横行、商行爲の不親切、それに伴ふ商業者と消費者との對立的な態度は、直接には商業者の責任とすべきものからずして、根本的には我が時局經濟に伴ふ弊態が大いに與つてゐると同時に、統制經濟や生産者や消費者の側においても自覚すべき点が多々あるやうに考へられる。もしも統制當局自身

が最初から統制經濟の對策について周到なる知識と準備とを保持せ現在あるやうな机上の天啓的企劃にのみ頼らずに済むものであつたならば、經濟社會の實際はもつと變つたものになつてゐたに相違ない。さらさら考へられるのは、統制の相手方とせられてゐる生産者と中間商業者と消費者との側において、統制經濟そのものに對する精神的準備の不足してゐる点である。従前の自由經濟のもとにあつては、善かれ悪かれ、利潤追求を目標とする一種の商業道德なるものが、各人を結ぶ經濟的規律をなしてゐたのであるが、現在の統制經濟下においては、何各個人を

對し、配分となるのであるか。一部の富者や業者などの専ら官營的經濟倫理の效果少きことは既に試験済みであり、余りに國民の生活利益を無視した經濟的對策が心から行われる筈はないのである。その結果として、やゝもすれば、統制とは命の別名なるかのごとき諷刺を蒙らるゝ上からの増徴と配分とに會ひさへしなければ、配分には配分引でも向ても配分引、買手に對する無禮無儀ならは居り前だといふやうな態度に陥る危険が多くなつて來る。

すなはち統制は、その關係者全体の自利に對するものでなければ無意味であり、結局においては各人が國家的要求に合致するための善公的行爲として、國民全体の義務感と責任として成立つものでなければならぬのである。いひ換へれば經濟的分野における組織精神の養成と増進とに努むべきものではなからうか。しかもその國民生活の基礎たるべき組織の運用そのものについて、なほ現に配分を配分といふものがごとき配分が考へられてゐるならば、商業道德よりも國民道德の提唱こそ、まづ最急務であらう。要するに新商業道德の提唱は、時局下における統制經濟の實現と國民道德の確立とをあげせ考へる時にはじめて十分なる成果を收め得るのである。

ハんで統制下の商業道德は、いかに個人主義我利己主義から、遂に
に減私奉公主義、ハラスク起す得るに右の行ふに事ハ、其の言ハ、
を考へてゐるが、こゝに又救ひを業者も代へ、
の低減ハ、今行はれ、用合戦ハ、列強指導人使ハ、優勝族を欣賞

藤原樹



するに、この旗、獨逸ハ、今行はれ、用合戦ハ、列強指導人使ハ、優勝族を欣賞
風は、先鋒の我威ハ、その祖先より、心き因縁ハ、あつて、是れ、昔ハ、今
我邦の海軍ハ、今も、この旗、獨逸大使ハ、注意と志を、固全ハ、行ハ、
鼓ハ、優勝族を、煽ル、ことハ、
多ク、この旗、倫理の、事ハ、
口、吹ハ、今、今、今、
其、その、御、
完ハ、い、
の、
の、
左、の、
く、

は帝國憲法が 明治天皇の深き御思召によつて維持され
た儼然たる事實であります。板垣退助伯が或る時、帝國憲
法は伊藤が獨逸の眞似をしてこしらへたのだと 新聞に書
いたことがあります。それを御覽遊ばされた 明治天皇
は御立腹なし給ひ、「板垣ともあらう者が此かる間違ひを
陳べるとはもつての外である。帝國憲法は何も獨逸の眞
似では無く朕が研究に研究を重ねた結果制定發布に至つ
たものである、然るに板垣のやうな考へを持つ者があるの
は、また憲法の精神が徹底して居ないからだ。伊東お前は
永い間伊藤の下で此のことに従事した者だから、お前が一
番よく知つて居る筈だ。依つてお前は世の誤解をとくや
うに努めよ」との大御言を蒙り、伊東巳代治伯は伊藤公と
往復して、憲法擁護の方法を議したといふ事實がございます。
之は私も伊東伯の自慢話にきいたことであります。
それから明治二十三年議會が始まつたが、その頃は薩長
藩閥と政黨との血みどろの争闘のために、兎角國家の前途
をも忘れがちと見えました。西徳次郎といふ人は二十五年
に書を奉つて憲法中止説を申上げました。又、獨逸のウイ
ルヘルム一世も二世も、日本には尙早すぎるからとて議會
政治の中止勸告をいたしました。明治三十年に陛下は佐々

木高行侯に向はせられ「松方(總理大臣)は議會がむづか
しくて困ると言つて居たよ」と仰せられました。すると高
行侯は早速議會中止方を言上いたしましたのであります。此の
人は 明治天皇の御信任の厚いお方でありました、併し此
の時 陛下は「朕は松方が議會がむづかしくて困ると言
つたことをお前に聞かせたよけで止めるの 止めないのと
言ふことを言つたのでは無いから、間違つてはならぬぞ」と
仰せ賜つたことが佐々木侯の記録にございます。之等に
よつて帝國憲法と議會政治が永い間 明治天皇の御聖慮
によつて擁護せられたものであること、天皇が如何ば
かりその健全なる發達を希つていらせられたかなどを深
く拜察することが出来るのでございます。

藤原製

が、
 ろ、
 しく、
 り、
 の、
 ん、
 ち、
 こ、
 材

まゝし、且つ鬼行極の探偵とて取逐き、清野亭の跡をたぬかあり
れと承り、清野亭人の跡をたぬかあり、（清野亭人の跡をたぬかあり、
こと、（清野亭人の跡をたぬかあり、
指し、（清野亭人の跡をたぬかあり、
とが、（清野亭人の跡をたぬかあり、
兵隊の連隊を保つこと、（清野亭人の跡をたぬかあり、
足程進んた来れ、（清野亭人の跡をたぬかあり、
軍が、（清野亭人の跡をたぬかあり、
北位におり、（清野亭人の跡をたぬかあり、
秋籠と、（清野亭人の跡をたぬかあり、
と手、（清野亭人の跡をたぬかあり、
祝、（清野亭人の跡をたぬかあり、
り、（清野亭人の跡をたぬかあり、

藤原製

王之、（清野亭人の跡をたぬかあり、
い、（清野亭人の跡をたぬかあり、
あ、（清野亭人の跡をたぬかあり、
の、（清野亭人の跡をたぬかあり、
ハ、（清野亭人の跡をたぬかあり、
ま、（清野亭人の跡をたぬかあり、
空、（清野亭人の跡をたぬかあり、
と、（清野亭人の跡をたぬかあり、
九、（清野亭人の跡をたぬかあり、
開、（清野亭人の跡をたぬかあり、
之、（清野亭人の跡をたぬかあり、
海、（清野亭人の跡をたぬかあり、

○英回と檢けん為るを五つ上つに米回は大紋領運屋非米穀を公約しん處也
あるに理由を以て公約を會同譯子行ハテあるを英回の近々非運の形
取立、利を極りと主た心出美をい為り去きり米を了るる米穀を注許
と進んかゝる、米回は氣を極りて、英の山崩れつて米れん積目も
踏踏の上氣味もあつ、回内を飲んか米穀更對冷若七つとてさるる美し

を纏めて一冊の本として上梓したいと思つてきた。上梓するに資料が甚だ多
岐に達憾の思ふが、宜し市販本を歴史的に傳へたいと自らも思つてゐる。嘗
つて四葉位稿士に編輯する心掛けを勧められたこともあつたが、さうい
ふ面倒な資料の蒐集もするから、さういふことに別り、自分も海を渡して、念は
今けりだが、切實に一族の内で取りかかるといふことを上梓することの自分の志
を充分の意をもち、喜ばしく思ひ、そんな話をして、今といつて挿入する
との不十分である、そんな話を聞きつけて、その返答を断つた。此の言を
入るべきならば、祖先の業績や清徳などの類、其の多くは自分の家
柄にあり、斯ういふ附随して、出して置きたいと思ふから、別稿の
自分の志をもち、するから、自分も、其の用を替へると言つてやつた。(六月
十一日記)

○樋口一葉の全集が出版さうするつもりで、想ひ出さうと、此書者が自分の友

藤原

板本三郎の行状の人のあつたことである。板本の早大出身の編輯司
法定、^{（五七）}晩年の秋田山梨兩縣の知事と云ふ人である。或る時抱口一葉は
自分の書が平時代り許嫁の婦人と、^{（五八）}読つたか、其頃一葉は既に文壇の
名を成し、この頃が、自分も唯一の場、^{（五九）}おかしな事、^{（六〇）}流してゐた
が、其後出版された女史の日記を讀んで、^{（六一）}と、^{（六二）}板本と許嫁の事か
番、^{（六三）}く書かれてゐる。結婚の或る事、^{（六四）}傳ひ成さうと、^{（六五）}か分つて、^{（六六）}一編の
流無きを得る。これに、^{（六七）}か、^{（六八）}動機が、^{（六九）}女史の作品を二三讀んで、^{（七〇）}見ると、^{（七一）}女史の文
章の妙に驚かす。或る時、^{（七二）}か、^{（七三）}許さんと、^{（七四）}敬服の二字を以つて、^{（七五）}女史の作品を
つづること、^{（七六）}躊躇する。或る時、^{（七七）}か、^{（七八）}大抵女史の文章は、^{（七九）}常用の書かんと、^{（八〇）}わ
る基礎的、^{（八一）}素養に乏しいが、^{（八二）}中を以て、^{（八三）}許さんと、^{（八四）}か、^{（八五）}或る時、^{（八六）}或る時
流況漫の流ん、^{（八七）}或る粗茶の失し、^{（八八）}大塚、^{（八九）}か、^{（九〇）}福、^{（九一）}か、^{（九二）}女史の著作は、^{（九三）}往々
衝氣のあり、^{（九四）}つりて、^{（九五）}か、^{（九六）}女史の著作は、^{（九七）}冗漫の流ん、^{（九八）}粗茶の失し、^{（九九）}か、^{（一〇〇）}往々

○頼山陽の日記五相の考より、愚問四通の三言四句は刻本の誤り
ありふるとも、題に「愚問」の字あり、遺忘の傍に「愚問」と
あり、

唐碑晋帖心懸、蜀嶺刺麻手楚、
魚飲、揮毫紙上書雲行、
曹氏洗墨池中

題愚問四通之一

頼蒙

○新編中央書局社長川上清麻呂が、又方振り、訪ひ来つて一時分路、
流つた史内、伊東社主のことが、出れば、その人、海甲の池、この大宮と、
大なる、故後、深い因縁があることを、初め、知られ、
人ハ、身中、早く、海甲、の、事、通曉、人、此、が、伊東、の、所、前、此、人、の、事、
して、何、々、月、も、と、云、の、旅、有、り、あ、つ、た、の、か、一、時、の、事、と、疑、は、ん、ん、こ、も、あ、つ、た、と
云、ん、だ、此、人、も、上、前、と、云、い、れ、ば、故、後、身、中、の、脚、色、入、る、へ、と、人、と、前、記、の、内、に
かく、は、ん、千、文、が、和、美、の、大、家、が、著、し、た、因、縁、と、云、ふ、事、の、西、洋、の

藤原製

故、ま、る、と、之、の、一、回、形、を、測、り、二、弄、法、と、云、い、れ、る、が、
さ、う、し、ゆ、り、と、出、版、さ、し、ゆ、り、の、因、縁、を、終、つ、て、
れ、る、と、云、ふ、事、で、感、服、し、た、佐、果、む、あ、る、こ、と、を、初、め、理、解、し、た、

隠まはれた根岸翁

恩人の孫と劇的対面 感慨無量の長岡戦争

支那の役長岡戦争で山奥に隠れし生命の安全を得た根岸翁と之を隠まつてやつた義侠の男仁左衛門、新河田氏との劇的対面

去る 七日から五日間、井原の根岸翁の遺言を聞き、翁が長岡市互衛社で開かれると云ふので、根岸の恩軍を愛する支那の戦時近近の歳で、根岸が此時、隠れし大小を携へて来聞した元日本郵船会社重役根岸大郎は、義侠が隠れし大郎を自働した唯一人の生存者として、その不自由だが、翁の恩は、其時時代其儘にて八十六の高齢とは信じられぬほどの若々しさである。

若し ヤ武士の子孫だといふ事を知つて途中で、義長軍に捕へられてはと云ふので、

當時十三才の翁は支那の役長岡戦争で武運無く、薩長軍の馬部に隊を離れらるゝや河井の一族であり、孫に男子であるので、薩長軍に召捕へられてはとの懸念から、父母が愛護して、徳尾郷の山奥に居又へ上野谷村から来て居た従僕の孫七に、呉々も頼み、孫七の生家に、隠まつて居ふこととなつた。

征後孫七の實家仁左衛門方に居た孫次郎は自分より三ツも齡の多い仁左衛門の子十六歳の四郎と共に野山へ遊びに行き、百合や自然を眺めたり、鯉魚を釣つたりして遊んで四ヶ月、居たが「孫の又」に居たのでは、身毒の危険があると云ふので、仁左衛門の取計で、更に仁左衛門の親戚である、南浦原那通町村の孫七の七方、に連れて行つたが、薩長軍が八十里越をして、津浦へ行くこととなつた。孫七は孫七に居

たのでは東に形勢だと云ふので、山奥の小屋の中に住まはせて、孫次郎の身の安全を圖つたのである。

そこ、仁左衛門の厚意を返しては、一世情、又に行きた仁左衛門の位階に、榮耀したいとは、郵船会社の重役在職中から、念願であつたので、去る九月、日天人間、徳尾町まで行つた。

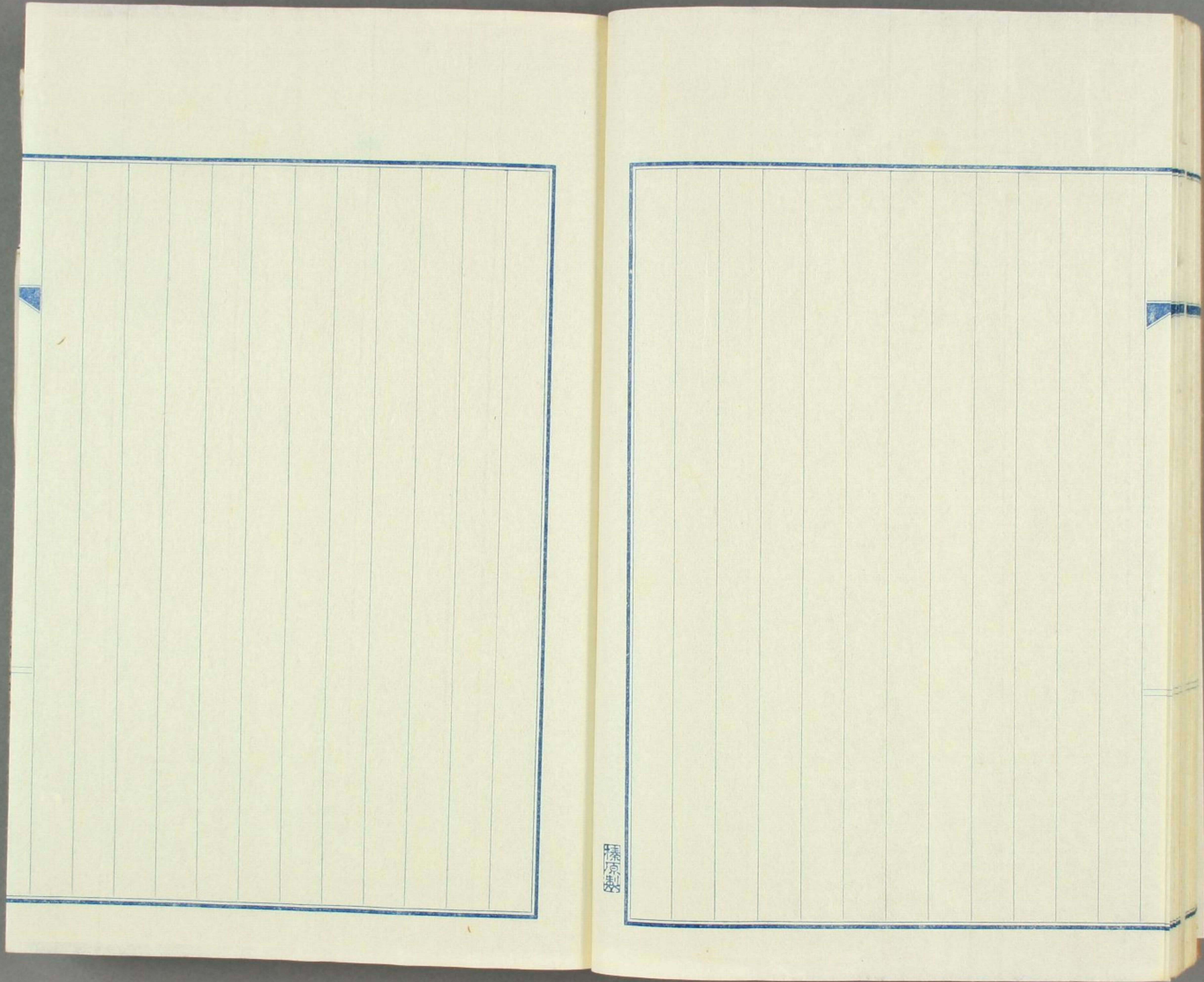


が腹筋が起きたので、やむなく長岡へ引返し、野本旅館で、中流の一室が通じたものか、仁左衛門の孫に當る元長岡義大、麻野部の河田三郎氏（五十才）が、城岡前第一産業、工場幹部として、勤勞して居

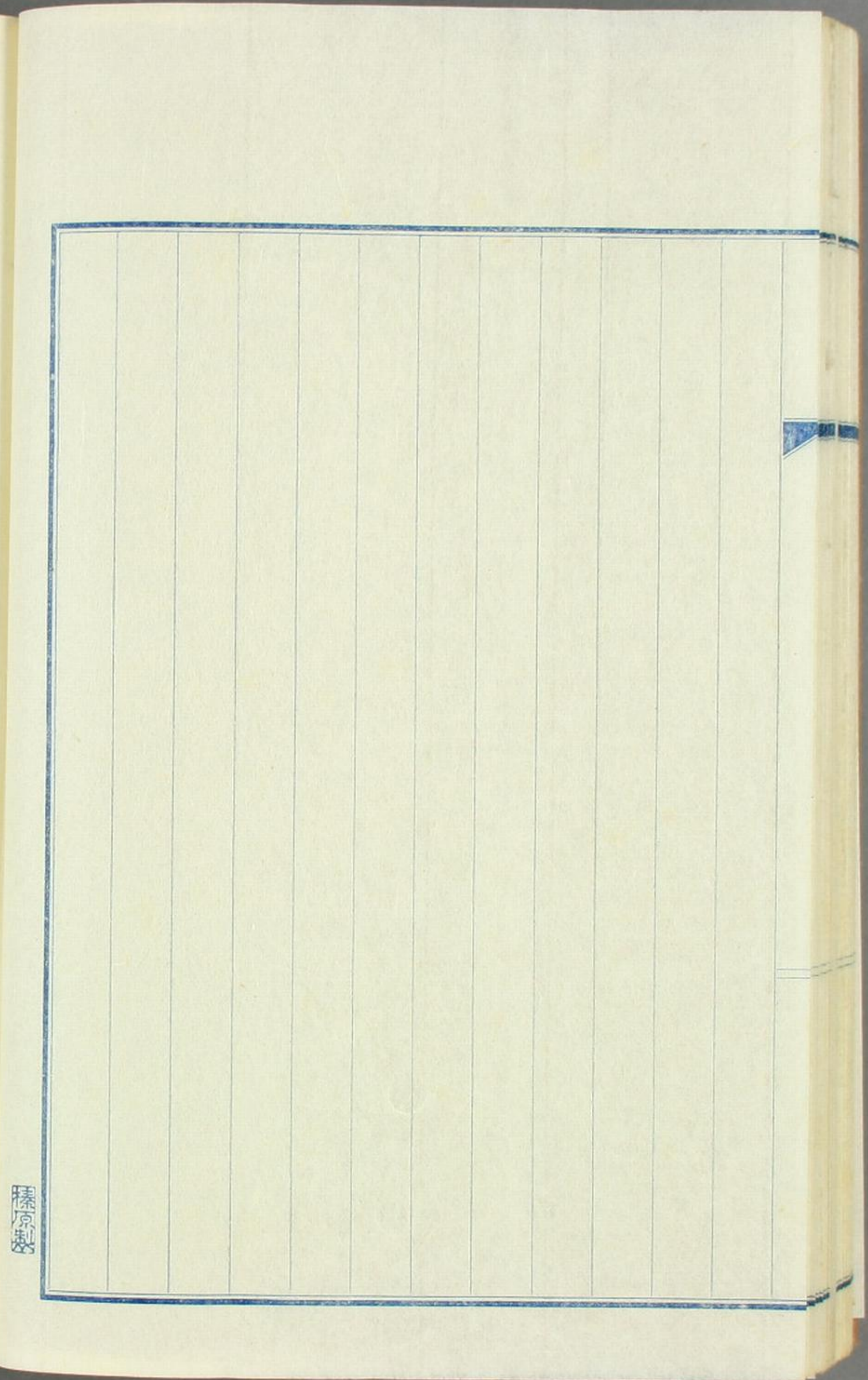
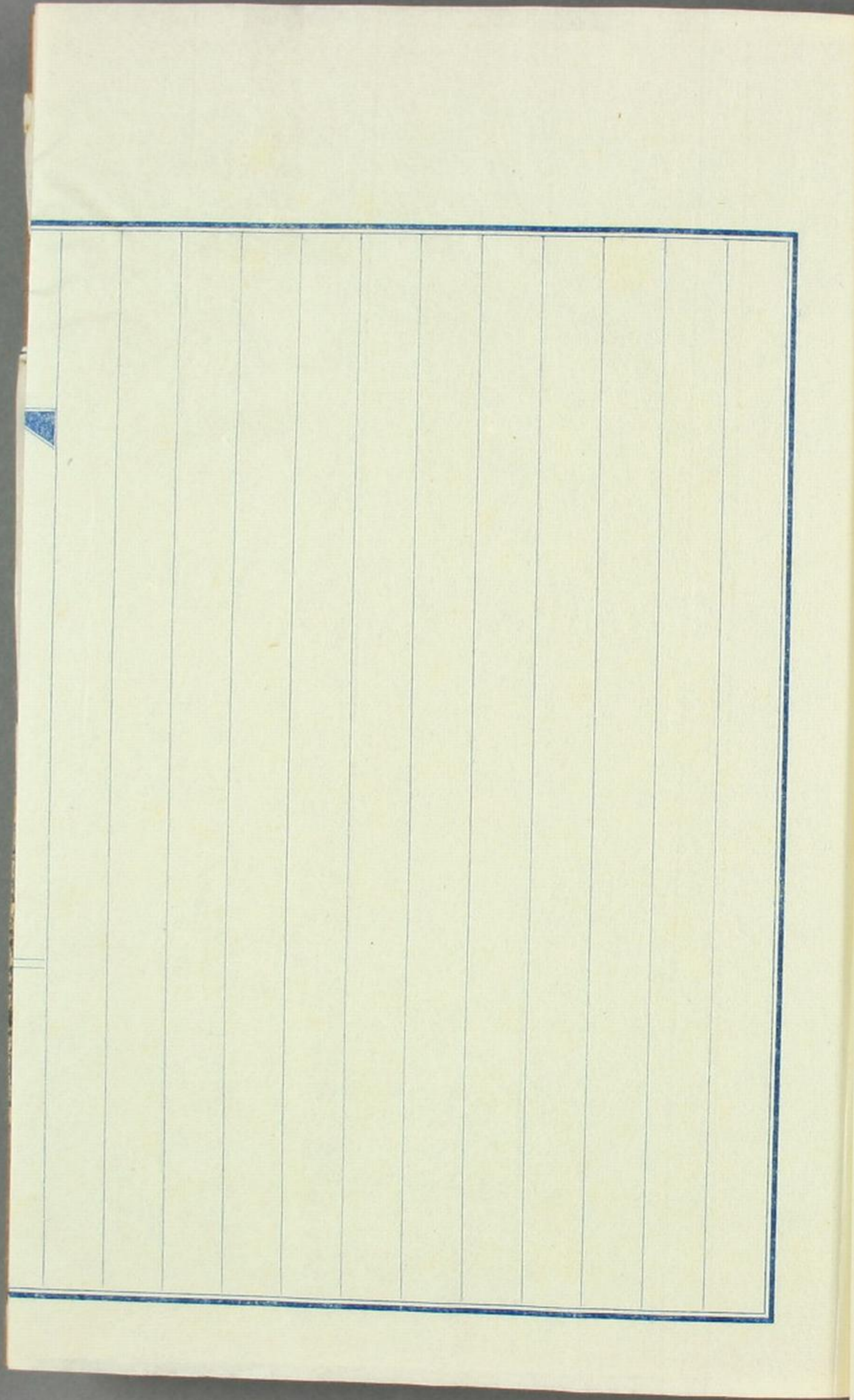
る事が判明、之を聞いた河田氏は、早速野本旅館へ駆け付け、在りし日の物語りを、翁より聞いたが、十二歳の孫次郎少年の、漁ひ相手であつた四郎は、河田氏の實父であつた事まで判明し、それから七十年前の昔語りには、驚きなかつたが、翁は「仁左衛門は大變酒を嗜んで居たから、徳尾前に

られ、東京した、右に付き、河田氏は、徳尾町から引退されて、よかつた徳之又は、それから往復七里もあるし、又仁左衛門の處へ行つても、本人は四十年前に死し、骨は何代も變つて居り、翁の話を、知つて居る者は、なく、仁左衛門方から、河田へ、子に來た、私の父も、十五年前に他界してしまひました。私は若い時分、よく父から、長岡のサムライの子で、利ノ坊を家にかまつて居り、私が、お相手であつたが、近頃の子供と、噂するると、斬るぞ、と云つて居たが、どうんな人間になつて居るやうかと、思ひ出しては、語つて居たが、根岸翁であつたとは、夢のやうな話である（翁は根岸翁と河田氏）

x x x x x



藤原製



藤原

知事のお聲がかり

英語勉強無理強い

強硬手段で學生集め

近代の戦後の文 英語の研究をはじめた恐らくこ
明は明治初年の 英語普及の嚆矢ともいえや
教育特に英語の 普及に於いては 三年六月十九日に平松時厚が
ふところが多い 知事として着任した平松知事は
學問盛んなると 英語の必要なることを痛感して
ころ文明又拓け 先づ外輸入による正統の外國語
るは何時も同じ をといふのでブラウンといふ人
ことであるが、これは戦後文明を 輸入した、ブラウンは當時流行
史を飾るものである新譯は進新 した英文典の著者でいはいゆる
以前五巻の一として別に附載 したブラウンの文典といふのはこの人
してあため新譯には特別に外 國人が著したものでした
個人相手の係員が置かれた、 ブラウンは娘を一人連れて來
界の先輩として津田仙など新 譯に於て外國語をしてゐたこ
温に於て外國語をしてゐたこ の人が、地方ではまだ「寺子

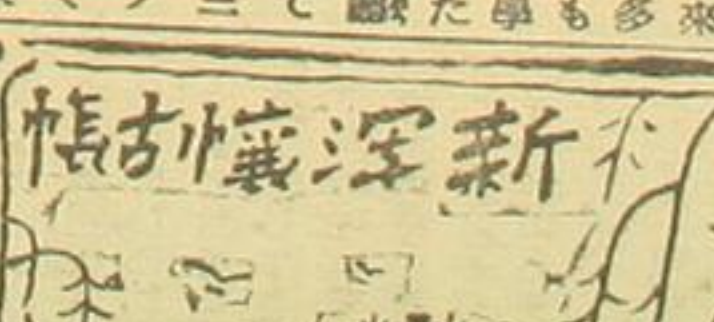
新瀉英語學塾

42

屬全盛の時代であつたら、
ブラウンの英語を教へた學校
といふのも、先づは家業の少
し國つた程度のものといつて
もよかつた
今のやうに何々學校といふ名の
冠せられたものでもなかつた、
それに英語を専門に教へること
などしなかつた、漢學、算學な
どとも並立してゐた譯で、
たゞ各學科ごとに場所が違つて
ゐたといふ位のところである、
英語の方ではブラウンが主任教
授といつた譯で、この外郎の一
等譯官中村時高といふ人が助教
授だつた、譯官といふのは新
譯に於て外國人との交渉があ
るといふので、官職として譯官
といふものがあつた、一等譯官
から下つて二等あり、英語に精
語る人 市島謙吉氏、本
年八十三歳、北浦原郡水原近
在名門の出として知られる、
東大出身元本社主筆たりしこ
とあり、現在早稻田大學名譽
理事、春城と號して隨筆をよ



仕事のある譯ではないから、
譯官は英語教授の補助をさ
せられてゐたわけである、外
國人を招んで教へ初めたが、
さて肝腎の學生はさつぱりな
なかつた、維新の戦後の後だ
から人心も定まらぬ時代で學
校で西洋の學問をしやうなど
いふ先覺者はまだ「出て來
ないから誰かしい學問に志すも
のはいふ、土地の者で入學
したものは何ともあつた
仕方がないから平松知事は
の役人に就いてその子弟をして
學ばせさせたけれども、二、三
十人位集まつた程度だつた、
ブラウンは三年たが人心かく
の如くだからだつて普及の效果
はなかつた儘に英語の萌芽を發
せしめたといふ程度だつた、平
松の後を襲つて譯官となつたの
は後年の譯官として知ら
れる大村清士補正譯官であつた
明治五年外務大省より聘して新
瀉へ來り込んで來た、若手のバ



縣廳へ出頭の際

義太夫語りの袴着用の教師

英人教師キング事件

楠本慶介の英語と何時何日秘密で出頭せよとい
ぬ説である
首藤隆三郎とい
ふ人が教師とし
て雇かれた、こ
の人は早稲田大
學に早く英語を
學び、歸國して
八戸下で仙臺から國代黨代議士
として長く擧げられた人である
なか／＼檜の良い好男子でよ
く黄八丈の羽織を着て學校へ出
て來たのを子供心に驚かしてゐる
首藤教師が初めて新瀉へ着いた
時こんな話がある、古町の秋田
屋といふ旅館へ泊つた、いよいよ
よ腕から召狀の來たのをみる

新瀉英語學塾

43

の事を萬國史から抜いて譯した
ところが先生仙臺から詭譎
が甚だしい、それで熱心な講義
もチンパンカンパンでちつとも
わからなかつた、さて新しい
學校は前の警察署の邊り奉行所
の官舎だつた、こゝは南二番と
いつてゐた、間もなく南二番と
いふので無造作に借用すること
にした、ところがこの様とい
ふのが縣人の代物であるから
天賞紙で作つて金糸で大きな
紋が付けてある、しかし首藤
先生、いゝ氣なもので得々然
としてこの様を借用、出頭に
及んだので大笑ひされた
又先生着任當初、第一の講義が
その時分限る新しい書物戦争



もまた千差萬別、若い方もあ
り幼き方もりて不揃ひなものだ
つた、初めの頃など佩刀の鞘も
あつた腰下の諸方から集まつて
ゐたから客館の設備もあつた
首藤教師時代の教育方針はい
はゞ變則流であつて、譯讀が
主であつた、正則に發音する
ことはその次、書物さへ理解
すればよいといふ風だつた、首
藤教師が多数の學生を教へた
のではなく、學生中の優秀者
を選んでこれに首藤教師が指
導しこの學生達が句讀師とい

大な資金を取ら
ない、是非犯人
いふので新瀉の
暴足を命じて徹
をやつた、しか
人は、す仕舞ひ
キングが借金欲
言やつたのだとい
で、資金は出さ
無耶に擧げられ
もなくキングを
落着いたのであ
キング去つてその後
が横濱で新聞記者
ある米人エドワ
・モスであつた、
・モスの最も驚か
大して學力はなかつ
れないが教へ方の
當水い間新瀉に
の時代版の一等書
つたといふ書き
つてみると、成る程抜刀でキ
ングの着で居る布團を上
から斬りつけた跡が透つて
る、體でも大損した、外人
を刺殺するといふことは全
く一大事である、このため英

三尾吉洋町夏戸(關係市町長あて評議を要すそを社新成任洋館會館所有郵龍丸行れば全日救助の見込みであるは有任を旗)

月謝十二錢五厘

生徒の譯文は新聞に掲載

44

遂ひに來たる一大變革期

新鴻英學塾

新鴻英學塾が生まれ
るとともに、新
發田、長岡、柏
崎の三ヶ所に分
校を設置、新鴻
まで來られぬも
のはこの分校で
學ぶやうにした
分校に教頭となつたのは久保扶
桑、小島鉄三郎、藤井三郎など
いふ人々であつた、久保は新發
田であつたが、後の二人は諒が
長岡、柏崎がよく覚えてあない
久保教頭が後年私に語つたこと
があるが、
久保教頭は北海道へ行つて何

か事業をやりたいと思ひ、儘
かの旅費を持つて東京を出た
そのころ北海道へ行くには越
後を通つてゆくのが近道であ
つたから、まづ越後へといふ
ので東京を脱出前橋まで來た
ところがこゝで思ひがけない
病氣にかゝつて旅費も殆どな
くなるころやつと新潟へ着い
た、このとき懐中には僅か金
一朱しか残つてあなかつた、
丁度新潟船便に知人がやつた
のでこれを頼つて相談しやう
と學校へ行つてみると生憎知
人は不在であつた、仕方がな
い旅宿へ泊つて一朱の金全
さらけ出してしまつたが幸ひ
にも翌日知人に會ふことが出
來た、知人は北海道へゆくな

ら金が必要から暫く越後にあ
て貯めてから行つたらどうだ
といふ
それもさうだとあつて新潟學校
の新發田分校へ世話して貰つて
教頭になることになつた、その
時は役人といふ資格でなくいは
ゆる御用掛といふ役で、職と
契約も丁度外國人を捕ふと同じ
約束を取り交はした、新發田へ
行つて二年ばかりすると楠本
令が辭めて永山盛輝令が來た
令が辭めて永山盛輝令が來た
すると久保教頭に呼出しが來た
令がさうも尤もらしく擡げて渡
し、聞いてみると、今後役人と

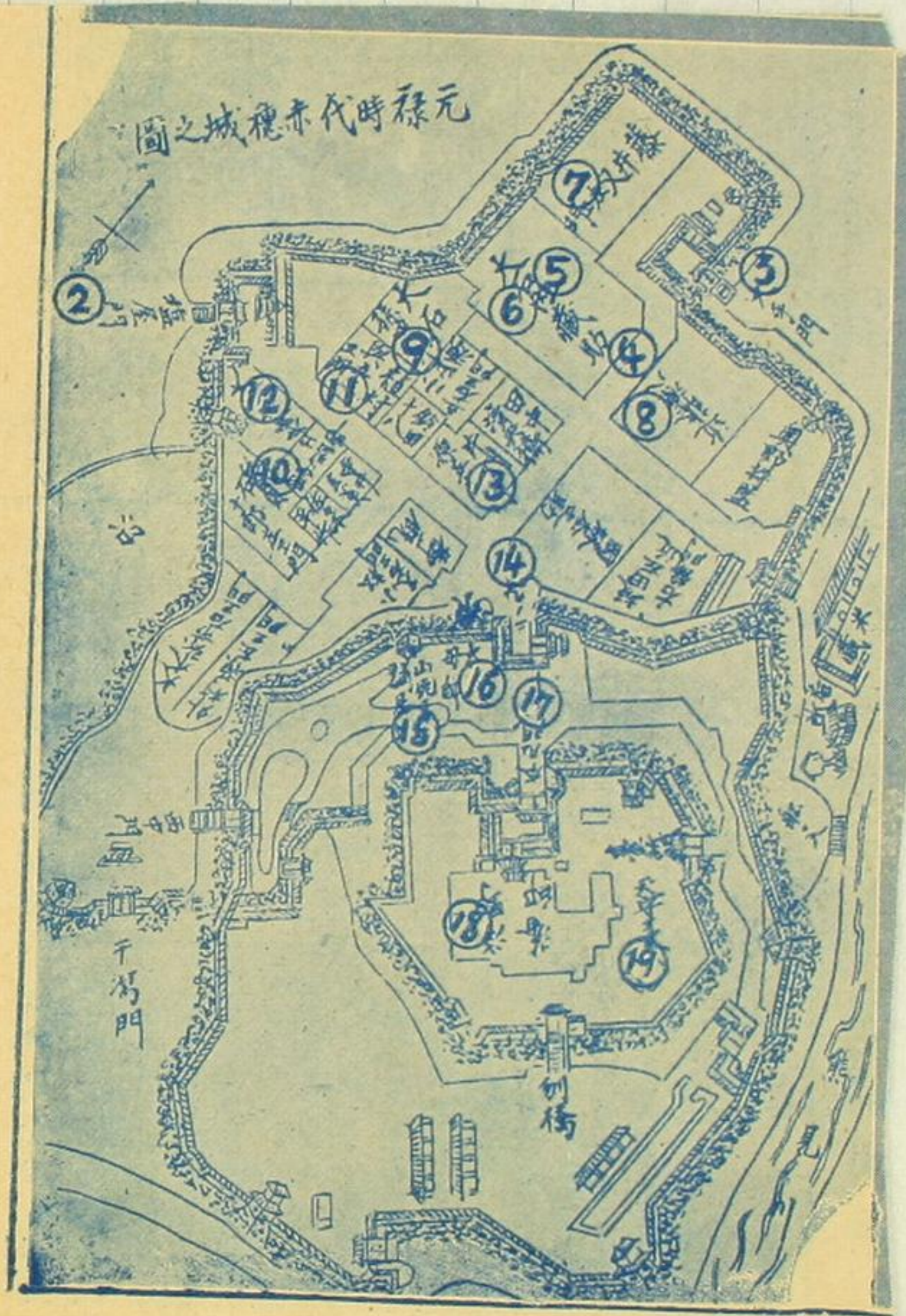
同じ扱ひにする、俸給を少し増
すが、柏崎の分校へ職任させる
といふ辭令だつたので久保教頭
大憤慨して辭意を表明した、こ
の時はまあ〜と宥められたの
で一時は思ひと違つたが間も
なく辭めるやうになつたといふ
のである
私は分校の方のことは詳しく
知らないが新潟學校本校の最
初の頃は丁度中學校程度とい
ふ形で、無論専門の學科を主
とするものではなかつた、専
ら英語を主とし傍ら洋算に力
をこめたものである、その組
織は今日の我が國の中學校と
は違つてどつちかといふと西
洋の中學校をそのまま日本へ
持つて來たといふ風であつた
モスの時代は極めて實際的な
教授法で、日用の事柄を主に
し、書物を讀むに音を正すと
いふことはもち論で、方なども
非常に重きを置いて書取の時
間が多かつた



たから習字に重きを置いた、こ
れにつれて上級には手紙を練習
させた、主として商用の手紙で
その獎勵の結果として今日の中
級よりもほるかにうまい譯文の
手紙を書いたものである、モス

の教へぶりは書取りなどのほか
はすべて自分の通りに學生を立
たせて置いて綴字なり或いは地
球地圖の地名を呼んでこれを
指させるやうにした、モスは書
がなかく巧で筆跡が見事だつ
た、その方法は立たせて順番
に問ふのであるがそれが答へ
いと次々に問ひ、答へた者を
上へ上へといつて出來なかつ
たもの、上へ進ませるのであつ
た、これだから學生は皆一生懸
命にはげんだのである
一方梅浦教頭は専ら上級の學
生並びに教頭以下の教師を二
三組に分けて譯讀を教へた、
それは輪讀の方法であつたが
その他自分文章をかい英文
に譯させることなどもやり又
外國新聞のある部分を分割し
てこれをおの／＼に翻譯させ
ることをやつた、さうして各
人の出した翻譯を讀めて書直
す人がその級にやつた、後に
言葉界に入つた藤原源太郎が
よく書き、又進者に書くとい
ふところから消書を擴充した
てゐる

藤原源太郎



東京

石黒子爵閣下を哀悼す

水哉 坪谷善四郎

陸軍々醫中將正三位勳二等功三級子爵石黒忠憲閣下には、今年九十七歳の高齡を以て四月二十六日に薨去せられた。

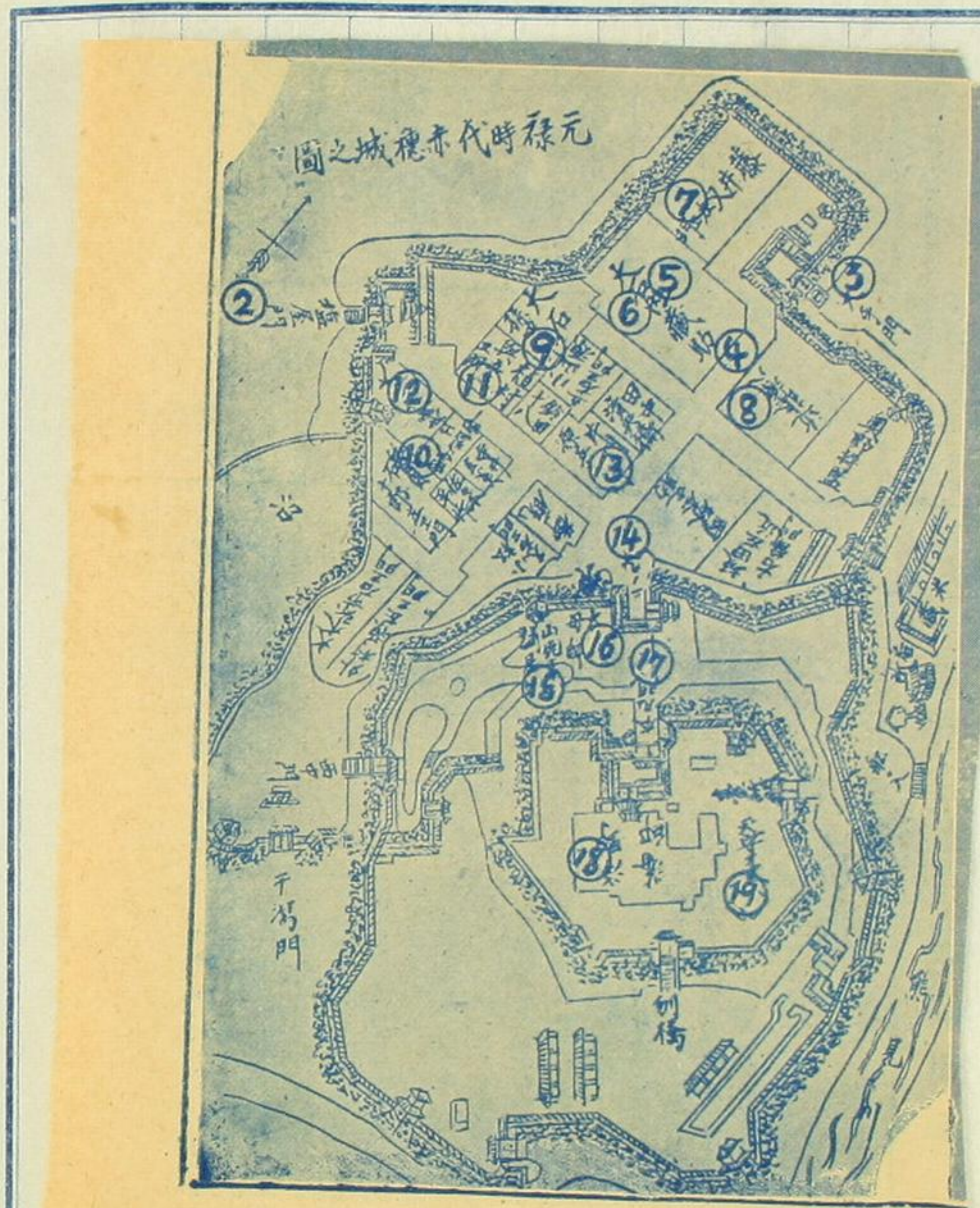
此の榮爵と、此の高齡を以て而して令嗣は現に農林大臣として、人生の幸福を一家に集められたる者は、現代の帝國に於て、正に唯だ閣下一人である。

門閥もなく藩閥もなく、空拳徒手、北越の田舎に身を起し、幕末の尊皇攘夷時代より國事に奔走し、尋で未だ漢方醫全盛時代に卒光して西洋醫學を修め、世は明治と爲て陸軍に入り、創業時代の軍醫行政に身を委ね、快刀亂麻を斷つが如き敏腕と努力とを以て、山縣

兵部大輔(有朋公)を輔けて徴兵制度を創設し明治十年の西南戦争には、大阪臨時病院長として八千五百餘人の傷病將兵を收容して一切を處置し、益々非凡なる大手腕を見認められ累進して陸軍々醫總監に任せられ、其間歐米各國を巡察し、歸朝して陸軍々醫學校日本赤十字社等を創設し、明治二十七八年の日清戦争には、野戰衛生長官として廣島大本營に於て、日々陛下の帷幄に參し、敵國和を請ひ、馬關に於て媾和談判中、突發したる清國全權李鴻章が、兇漢の爲に狙撃せられたる大事件も、陛下の勅命を奉じ、直ちに馬關に赴き、李鴻章を慰撫して、將に歸國せんとする彼を

説き、誓つて快癒を斷言して治療を我國に引受け、終に彼れの歸國を留め、彼れは傷痍癒えて、日清兩國の平和を回復したる際の如きは、國家の安危は實に閣下の一身に繫つたのである。されば日清戦役後、功を以て功三級に叙し、男爵を授けられた。

既にして顯要の地位、久しく後進の爲に塞ぐを避け、急流を勇退して自ら圓満辭職と稱して軍醫總監を辭し、閑地に就て別邸なる早稲田の多聞山莊に茶を賞しつゝ、普ねく社會各階級の人々と交はり、其間には大倉商業學校大橋圖書館等の創立を助け、懇請せられて校長及館長となり、既にして貴族院議員に勅選



元禄時代赤穂城之圖

東京府

なる光彩を放つたものである。其れだけでも優に一冊の本となるが閣下はそれに對する御禮らしいものを持つて來ると受けぬ上に、今後は一切話さぬと断はらるゝのである。

然るにまた明治三十四年から、博文館主大橋佐平翁は大橋圖書館の創立を企て其の御世話を閣下に御願すると、公益の爲ゆゑ世話もするが、それに何か禮などを持って來る様だと拒絶するといはれ一切御禮は致しませぬといふ變つた條件にて計畫が進み、工事中に佐平翁は致せしも、嗣子新太郎氏が工事を進め、終に三十五年六月大橋圖書館は落成して閉館し、閣下を館長に戴き、私が其下に御指揮を受けることになり、爾來三日一回つゝ閣下の邸に出入した。而かも其の無報酬にして懇切に御世話下さる館長を、大正六年九月まで十六年間御繼續下されたのである。斯くて同年今後館長は私にやれとて、辭せられしも、尙ほ同館筆頭理事として、一切の會計を監督し、館の小切手帳は閣下の手元に置かれて、月に數回私が圖書館の必要費は同邸へ頂戴に上つた。其れが大正十三年まで續き、同年八十歳になられしとき、金の事はモウ面倒だから辭すとて、其の仕事は大橋本店へ移されたのだ。

其後閣下は私に、八十八歳の記念に自傳を

書くから、君手傳へと仰せられ、私は薄田斬雲氏を伴うて、屢々同邸に參上し、一々御話を伺ひ、御秘藏の諸記録をも披見し、慎重に編述し時々閣下も筆を執られて竟に三年に亘り八十八歳の記念が九十歳に及び、書名も石黒忠愷懷舊九十年として、昭和十一年に博文館より出版し、其れが文部大臣から優良圖書として表彰せられた。

斯かる次第である爲に、私は毎度自分の宅へ種々珍らしい御菓子や果物や御料理を頂戴し、或は多聞山莊の茶會へ陪席し、また毎年暮には九段坂上の富士見軒にて、貴族院、日本赤十字社、大倉商業學校等の事務擔任の諸君と、もに慰勞の宴に御招待を受け、また大正十四年三月令夫人が逝去せられた際に、御遺言に依り坪谷は俳句の趣味があるからとて特に元祿の俳人大淀三千風の富士山の贊一幅をも頂戴した。

また毎新年には閣下の御揮毫を頂戴した中に、止むを得ざる人々から、君は頂戴の機会が多いからとて、強て請はれて割愛したるも壯時意氣壓三乾坤、處難常以生死論、老去擊龍搏虎手、南窓負暖撫兒孫。

水哉先生笑正 七十一况翁
「壯時ノ意氣坤乾ヲ壓シ、難ニ處スルニハ常

ニ生死ヲ以テ論ズ、老ヒ去テ龍ヲ擊シ虎ヲ搏ツノ手、南窓ニ暖ヲ負フテ兒孫ヲ撫ス」
昭和二年には
成辰元旦勅題山色新
早起偏欣入初春、逸軒烏雀報清晨、芙蓉入染當窓白、旭日暉々山色新、水哉雅兄笑正 况翁

「早起シテ偏ニ欣ブ初春ニ入ルヲ、軒ヲ逸ル烏雀清晨ヲ報ズ、芙蓉ハ染窓ニ當ツテ白ク旭日暉々トシテ山色新タナリ」
昭和四年には
昭和巳巳元旦三首之一、爲ニ水哉雅兄一筆、况翁

身仕三朝列老臣、不圖欽命進階新、無爲却愧業餐久、八十五回迎上卷、身ハ三朝ニ仕ヘテ老臣ニ列シ、圖ラザリキ欽命階ヲ進メテ新タナリ、無爲却テ愧ソ業餐ノ久シキヲ、八十五回上春ヲ迎フ」
詩句中の階を進めて新たなりとは、前年八月正二位に進められたことを言はれたのである尙ほ若干あるも之を略す。

實に閣下の思出は幾ら書いても盡きぬ。世には私と感懐を同じくする人も數多ある筈だ然るに今は幽命境を異にし、再び閣下の音容を拜せんと欲するもまた望む能はず、涙を揮つて追慕の一端を記したのである。

ビスマルク号は五萬噸 驚くべき堅牢さ

英艦長 組員 談

魚雷九發目で漸く撃沈

【ロンドン特電三十一日発】北大西洋の獨逸海軍に參加した英艦隊の一部の本國歸還とともに、その乗組員の報告によつて獨逸主力艦ビスマルク号が、英艦隊の中に孤立無援しかも最後まで闘つた苦戦の様子を明かにされた。これによつて明白となつたことは老練主力艦の船主と新鋭主力艦の船主との差が、なほ海上にあり、この差が、この水雷艦隊の戦術に代るべき電撃戦の効果を果である。

二十四日未明折からの雪あられで咫尺を并せぬ暗い夜海軍であつたデンマーク海峡が、俄かにさつと暗れ上ると、未だ明けやらぬ暗の光に海上六マイルの彼方にビスマルク号とプリンス・オブ・ウェールズ号の姿が見えた。プリンス・オブ・ウェールズ号は、ビスマルク号の前方に、三ノヤードを距て、ビスマルク号の十五インチ砲は、その前方に命中し、ビスマルク号は、その命中に耐えられたが、やがて大なる火柱に包まれた。やがて大なる火柱とともに煙霧、艦体の一部は天に舞ひ上つた、わづかに三分間の出来事ではつと思つた時は海上にたゞ一抹の煙が漂つてゐるばかりであつたといふ、生存者はわづかに三名、二千三百名の乗組員は、洗んだ、命中した艦隊の火が艦隊から離れ、艦隊は燃焼したといふのが定説のやうであるが、その

下は英艦プリンス・オブ・ウェールズとビスマルク号の同様の砲撃にかんがみ、特別の装置が施されてゐるはずのビスマルク号がまた同様の苦戦を受けたとすれば英艦隊のいふ通り方に一つの不審なる出来事かも知れぬが、ドイツ砲撃の威力のほどを思はせるものがある。それと同時に艦隊二十一年といふ老練と竣工後半歳の新鋭艦の差といふことも考へねばなるまい、これに反し新鋭艦の艦況はいかに困難であるかをビスマルク号は示してゐる。

ビスマルク号はドイツ艦隊の三万五千トンと発表されてゐるが、目撃者は實際は五万トン位はあつたとのべてゐる。英艦隊はビスマルク号を撃たされた後、英海軍の名譽のほかにこれを討ち捕しては大西洋

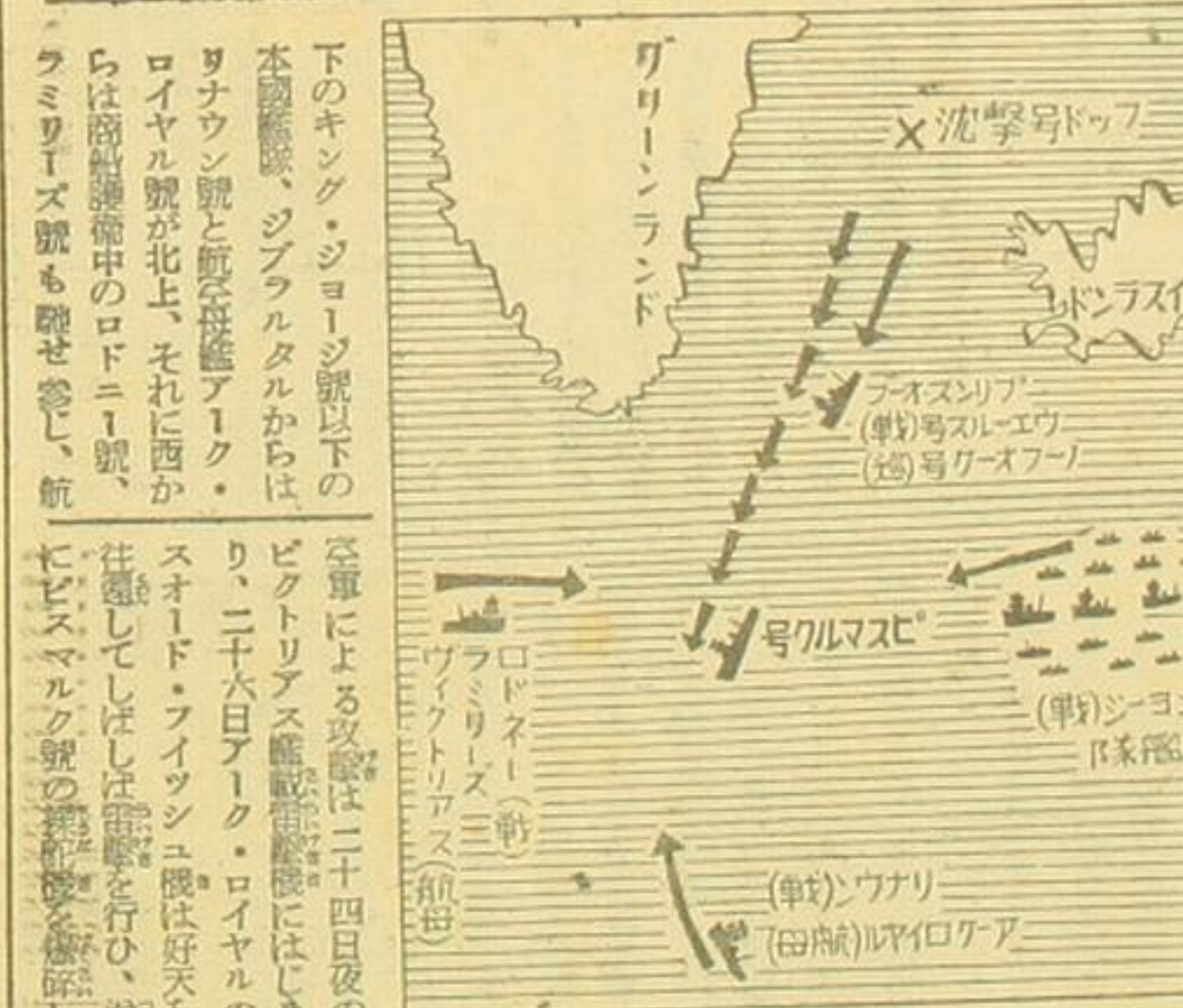
生命線が危いといふ實際的
必要から全力を擧げて艦隊、同艦隊をした

これに動員されたものは北から
はプリンス・オブ・ウェールズ
艦、巡洋艦ノールフォーク艦が回
遊、東からはトワイ同司令官艦

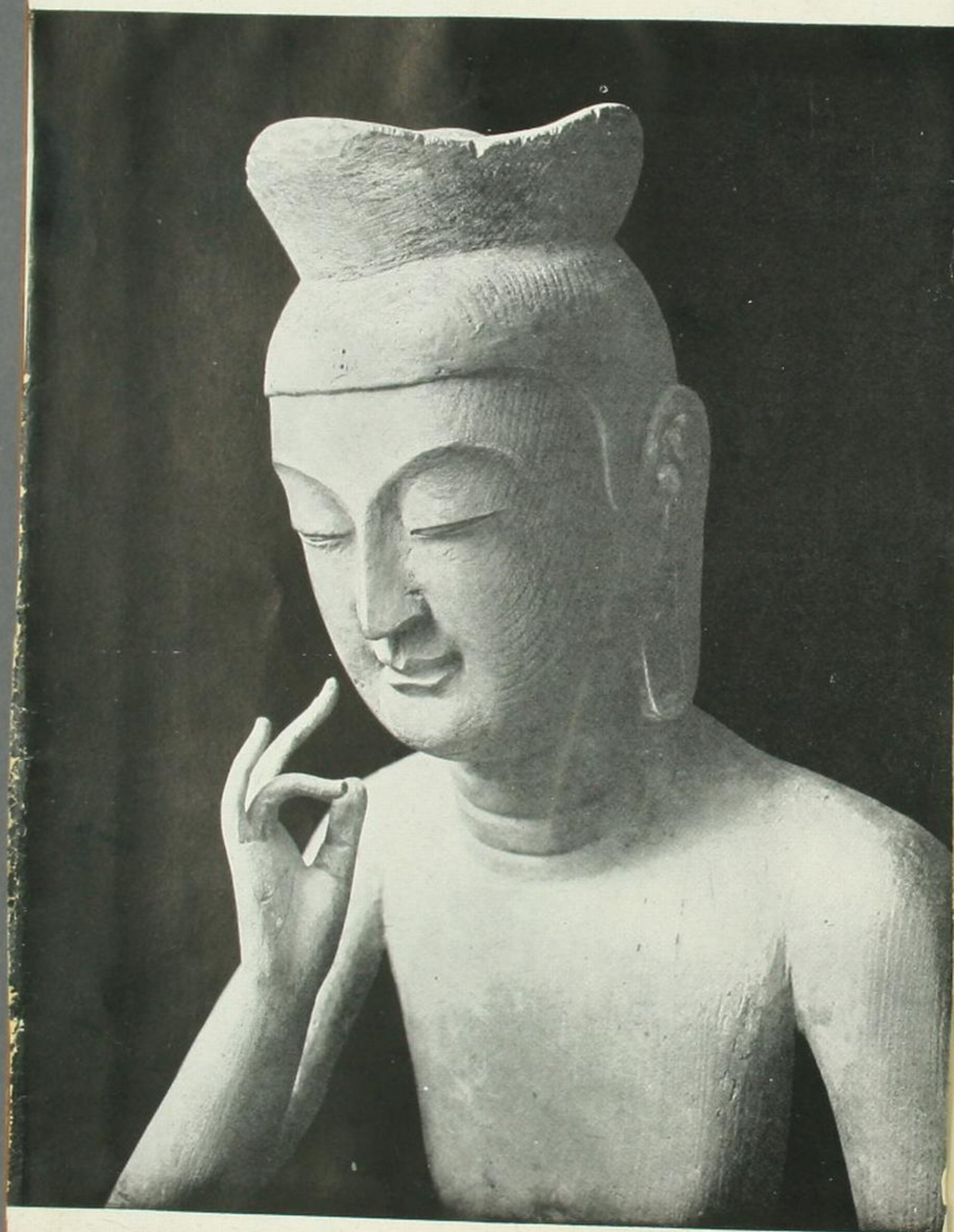
母艦ビクトリアス艦も加は
り、アイルランド西南方で十重
二十重に包圍した、これに本國
の沿岸警備艦隊、ニューファ
ウンドランドのカナダ空軍艦隊が
團集に全力を擧げ本國艦隊の
カタリナ飛行艦が遂にビスマル
ク艦の所任を發見した

て航行の自由を失はしめたキン
グ・ジョージ艦、ロドニー艦は十
二マイルの速力で舟を多くビス
マルク艦に追し、三ノヤード、つ
いて二万ヤードの近距離から十四
インチ、十五インチの巨砲を浴せ
て中央発射砲臺を破壊してビスマ
ルク艦を沈没せしめたが、艦隊で
はなかなか沈没しないので、遂に
巡洋艦ドーセットシャー艦をして
魚雷攻撃を行はしめ、ついで止め
を制した、ビスマルク艦の急をき
いて獨逸三百名はフランス海岸上
り艦隊に向つたが、間に合はず、
ビスマルク艦はかくて英艦隊出
の攻撃に遭つたやうなものである
が、魚雷の命中を受けた艦だけ
でも艦隊で三回、ロドニー艦か
ら一回乃至二回、艦隊から二回
ノールフォーク艦から一回、しか
して最後のドーセットシャー艦から
一発で合計八発乃至九発に及び
いかに新鋭艦隊の攻撃なるかを示
してゐる

乗組員は約八十名を残して全部
海底に沈んだが、捕虜の報告によ
ると艦隊乗組員は三千名に近く、
その中には訓練中の少尉候補生
五百名を擧げてゐたと



京都
大森
寺の
坊主
也



藤原

彌勒菩薩

京都太秦 廣隆寺 藏

題名

彌勒菩薩とは、釋迦に續いて娑婆に出生する菩薩である。慈恵を以て衆生を化益するが、善思生東大寺興隆に於て彌勒菩薩の像を戴いてゐる。寶冠の彌勒も山形を稱する。

製作年代

古天皇の御代に聖德太子の御代に於ける飛鳥時代の作と推定される。廣隆寺の傳によれば、本像は推古天皇の御代に於ける飛鳥時代の作と推定される。聖德太子の御代に於ける飛鳥時代の作と推定される。

使用材料

樟の木の用ひたる。全身の彫刻は、寶冠から、星霜の如く、木理が露れり。

像の大きさ

此の像の全體は、右上の小圖に示した如きもので、實より足先まで、三分の三、五寸、四寸、七寸、あり、本圖は、その部分を示したものである。

所在

京都市右京區太秦蜂ヶ岡廣隆寺に秘藏されてゐる。

作者

作者は詳かなく、百濟(朝鮮)より傳來のものとも云はれてゐる。

時代概説

我國の美術は、佛教の渡來によつて

推古佛の二様相

觀しては、飛鳥時代の佛像には、大別して二つあり、一は、素朴な體相、二は、豪華な體相である。前者は、推古天皇の御代に於ける飛鳥時代の作と推定される。後者は、聖德太子の御代に於ける飛鳥時代の作と推定される。

本像の特徴

本像は、素朴な體相を示し、彫刻の技術は、前記の如く、飛鳥時代の作と推定される。全身の彫刻は、寶冠から、星霜の如く、木理が露れり。

